
けいおん! トリップもの。

Dragon-me

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ トリップもの。

【Nコード】

N2824W

【作者名】

Dragon-me

【あらすじ】

タイトルの通り、アニメ“けいおん！”を観てベースを始めた普通の男子高校生が、“けいおん！”の世界に1日トリップしてしまうお話です。ですが、多少ニュアンスが違いかも……。

一話一話がかなり短いです。駄文でよろしければどうぞ。

プロローグ。

“ けいおん！ ” っ て知 っ てる か？

深夜のアニメだった が、高視聴率？録画率を叩き出し、主題歌のCDが1？2位独占した事もあり、更には今年、2011年には映画まで上映するらしい。

この影響で、主人公の平沢唯たちが通う桜が丘女子高校のモデルとなった、一時取り壊しどうこうで揉めた旧小学校校舎は一躍観光スポットになり、また今までほとんど売れなかったというレフティモデルベースが売れるようになったりなど、一種の社会現象も巻き起こした。

そして何よりも、バンドに興味を持つ人が増えたのだ。俺、野田^{のた}佑^{ゆう}もその内の1人だったりする。

昨年、高校に入った俺は軽音楽部に入り、ベースを始めた。そして“グルーガン” っ っーバンド組んで、楽しくも真面目にやっている訳だ。

なぜベースか？ それは秋山澪というキャラのベースがカッコ良かったからだ！

俺はまだまだヘタクソだが、やっぱり楽しい。今まで何も長続きしてなかった俺が、ここまでのめり込んだ事があったのだろうか。

“ けいおん！ ” は、俺の生きるべき道を教えてくれたのかもな。大げさだろうけど。

ま、そんな感じの俺だが、高校生になって初めての夏休み、俺は奇妙な体験をする事になるのだ。

その時の証拠が、俺の部屋に飾ってある。今でも思い出すな……
本当に夢みたいな日だった。色んな意味で、な。

今、あいつらは全員大学生か。何やってんだろつな……。あと、
高校の軽音部は無事なんだろうか。廃部とかなってないよな……。

まあいいか、俺が干渉する事じゃないし。向こうは向こうでやってるさ、きっと。

俺しか知らない、向こうでの出来事。昨年の2010年、その、
決して忘れられない1日が来た……。

その1：寝ぼけと現実の間で。

朝はだるい。

目覚まし時計に起こされ、ベッドから重い体を起こし、既に仕事に行っている母が作っていたトーストパンを食べる。

夏休みも終わりに近付く今日もまた、練習がある。電車通学のオレは早めに家を出なければならなかった。朝に極端に弱いオレがなんでここを受けてしまったんだよ……。今さら後悔しても遅い。

ま、学校生活自体は楽しいからいいけれど。

とつと2枚食べ終わり、眠い目を覚まそうと歯を磨いたり顔を洗ったりして、紺色ブレザーの制服に着替える。そして、楽譜などが入った既にボロボロのバッグを右手にぶら下げ、それとは対照的にきれいな真っ黒いケースに入れたベースを背負う。

このベースはオレが軽音部に入る際に、自分の小遣いで買ったものだ。フェンダージャパンの黒いジャズベース。確か、先輩が強烈にオススメしてたヤツだった。コイツを使うようになってから1回だけ別のベースを弾いた事があるが、とても弾きづらかった。

だから、コイツはオレの立派な相棒だ！

「ふああ……」

まだ眠い。その内眠気が覚める事を祈りつつ、オレはリビングに行つて、ベースとバッグをテーブルに置き、TVをなんとなく点け

る。今から行くと早すぎるためだ。

ちなみに、この時間潰しの時には、絶対に寝てはいけない事を心得ている。なぜかって……それはご想像に任せる。

物騒なニュースやスポーツは何となく観ていたが、天気予報の予想最高気温が37度だった事に萎えた。

いい時間になったので、再びベースとバッグを装備し、玄関に向かった。

玄関を出たあとは、近くの駅に行き、そこから7駅位乗る。その間寝ないようにi podは必須だ。

「ふああ……」

あくびをもう一度して、オレは玄関のドアを開けた。

「……！」

閉めた。一気に目が覚めた。

なぜならば、玄関の向こうが全く見た事のないどこだったからだ。

ウソだろ、何のジョークだよ。

「……きつと寝ぼけてんだろ」

もう一度開ける。

「結局、ムギの願いは叶ったのか……」

「結構思いつきり叩いちゃったんだけど、なんか喜んでた」

えええええ。今家の前を通って行っただのって……。

アニメ“けいおん！”に出ていた秋山澪と田井中律だ。間違いない。

非常に気にはなるが、オレはストーカーまがいの行為ができる程、狂った勇氣はない。ただ、家の前を通り過ぎる2人を見ているだけだった。

通り過ぎた後、再び玄関を閉め、しばらく思考する。

玄関を開けると、それはいつも見慣れた住宅街ではなく、どこなのかも知らない、目の前に歩道と車道がある風景だった。

そして、ついさっき。“けいおん！”の律と澪が目の前を通っていったのだ。2人の会話には“ムギ”という人物、つまり琴吹紬も出てきた（会話の内容はともかく）。

と、いうことは。

オレは家ごと吹き飛ばされたって事かよ!?

その2：ドアが信じられない。

……どうせ夢の続きを見ているんだよ。

頭を壁にぶつけてみた。

「……痛い」

マジかよ。

今オレがいる場所は、オレの世界どこを探し回っても存在しない。

なにせ、アニメの中にいるからだ。

よく見ると、家や自分にも変化があった。完全にアニメの絵と化している。

どうすればいいんだよ。オレ。元に戻る方法も見つけないが、せっかくだから唯たちと交流したいというか……。

まあ、そう上手く行かないのが現実。諦めた方がいいんじゃないのか？

さてと……。

「ふああ……眠っ……。ん？ 眠い……？」

あ、そうだ。

寝よう。

まだ夢じゃないって決まった訳じゃないし、寝る事によって何か進展するかもしれないし。“家宝は寝て待て”、とかというやつだな。

ん？ 意味違う？ それに“家宝”じゃなくて“果報”だって？
そんなん関係ねえだろ。

じゃあ早速、自分の部屋に行って寝るか。オレは自分の部屋につながるはずのドアを開けて中に……！

「うわっ！？」

「きゃっ！？」

頭に鈍い衝撃が。それに、今いる所はどこか知らない通り……どうなっているんだよ！？

「ゆ、唯先輩大丈夫ですか！？」

ゆ、ゆい……？

視線を下に移すと、制服を着た茶髪のボブヘアの女子高生がしりもちをついていた。

間違いなく“けいおん！”の平沢唯だ。隣にいる小さくてやたら長いツインテールの女子高生は、同じく“けいおん！”の中野梓。

……だから何が起こっている！？

「う、うん……ん？」

唯はこっちを見てあっけにとられた顔を。梓も同じく。オレも間違いないそうだ。

「何もない所から……」

「ドアが突然出てきましたね……」

2人の顔が真っ青になっていく。やばい、これは逃げられるパターン……

「もしかして君、超能力者なの！？」

……じゃなかったらしい。

「ゆ、唯先輩！？早く逃げましょうっ！……」

慌てて唯の手を引いた梓は、そのまま唯を引っ張るようにして逃げていった。

……結局逃げられた。というか……。

靴下なのもおかまいなく、少し外に出て自分がいた所をみると、ドアが何もない所に出現していた。ドアの中に見えるのは、オ

レの家の廊下。

ドアの後ろに回ってみる。何もない。

後ろから触ってみる。何もない。

再びドアの前に来る。確かにドアの向こうに自分の家の廊下が。

本当か……？

もう一度後ろに……。

「あのー、何……やっているんですか？」

見られた！？

ちょっと冷や汗かきながら後ろを向くと、そこにはスカートの私服を着た、茶髪でポニーテールの少女が立っていた。

彼女はおそらく平沢憂。唯の妹だ。すごくキョトンとしている。

「えと……その……」

こんな時どうするんだよ。すっげー焦ってるよオレ。

そんな動揺しているオレの後ろのドアに、憂は気付いたようで。

「うわっ、なんかありえない」

「……ですよね。オレも困ってるんです」

あ。言っちゃった。

「困ってる……？」

うっん。どうしよう……。自分の顔が固くなっていくのが分かる。

「どうしたんですか？ まさか私余計な事……」

憂の顔が段々泣きそうになっていく！ うっっ！ 泣かれたら困る！！

もういいや！ 特に純粋な憂なんだ、きっと信じてもらえるはず……！

「全然全然！ ええっと……何かオレでもまだ信じきれてないんですけど、オレの家のドアがおかしな事になっているんですよね……」

「ドアが……おかしい……？」

その3：運が悪過ぎる。

「そうです。玄関を開けたらいつもと別世界で、自分の部屋のドアを開けたらここに来てしまいました」

「え？ ど、どういう事なんですか？」

状況説明は苦手なんだ、カンベンしてくれ……。

「と、とりあえず上がって下さい！ それが手っ取り早い！」

てか何緊張してんだオレ！！

「お邪魔していいんですか？」

「はい。あ、脱いだ靴は自分で持って下さい」

「はい」

憂は靴を脱いで、オレの家に静かに入っていった。

「お邪魔します」

丁寧にドアを閉める憂。

「ここ、オレの家の廊下で。で、今入ってきた所のドアが、本来オレの部屋に入るドアなんです」

憂もなんとなく理解できたようで、

「そ、そんな事あるんですね……」

と驚いていた。

「あと、玄関のドアも」

実は玄関に行く時、ふとカレンダーを見ると去年2009年8月のカレンダーになっていた。ついでにタイムスリップもしてしまった事が分かった。

オレは靴に履き替え、ドアを開ける。しかし……

何か吹雪が吹いているし！！

「寒っ！！」

「寒いい！！」

すぐに勢いよくボタンと閉めた。玄関には少しばかり雪が積もっていた。

「……おかしいな、さっき開けた時はそんなんじゃないんだけどさ」

まさかこんなひどい目に遭うとは……。いくら何でもこの自然冷房はやりすぎだ。

「あれ……ということは」

まずい。さっきの所ももしや……！！

憂が慌てた様子でさっきの所、つまりオレの部屋のドアを開けた。すると、どうだろうか。唯とぶつかった道路ではなく、別の住宅街の一角に出てきた。

嫌な予感は的中した。

「そんな……」

悲しそうな顔をする憂。

やばい。憂を閉じ込めてしまった。

「ごめんなさい。オレが家に上がらせたばかりに……」

「いえ、私が上がってしまったのが悪いんです。気にしないで下さい」

やっぱりいい子だ。ただいい子すぎてオレが悪く思える……。

「あ、でも何回か開け閉めすれば帰れるかもしれないですし。まだ開けてないドアもあるので……きっと帰れます」

今のオレにできる事はこの位だ。

「ありがとうございます……」

元氣、なさげだな……。

憂は一度ドアを閉め、再び開けた。が、ドアの外はさつきと同じ知らない住宅街だった。

「はぁ……」

憂からため息がこぼれた。

オレも協力してやないと。一番奥のドア目指して歩く。

憂が別のドアを開けるために移動した時。

「……あ」

憂の足に、ある物が当たった。長方形で、薄っぺらいあれだ。

オレは危機を感じた。

それは一番見られてはならないもの……よりによってなぜここに落ちているんだよ……！

しかし、時すでに遅し。

「けい……おん？」

憂は、それに書かれている文字を読んだ。

その4：窮地に陥った。

「これって、DVDだよね……？」

“けいおん！”のDVDを、“けいおん！”の世界の一員である憂に見られてしまった。

当然本人たちは、オレらの世界では有名人であり、また日常がアニメとして放送されている、という事など知るはずがない。

「あ、お姉ちゃんかわいい。梓ちゃんも……でも何で……？」

ジャケットの絵の感想を述べつつ、疑問を口に出す憂。

どうするんですか。一体。

「あの、これって何のDVDですか……？」

どうするんだよ。オレ。このままだと確実に変態扱いされるんじゃないかよ！！

震える足。汗ばむ手。固まる体。

「……あの？」

もつとつにでもなれっ！！！！

「オレは別の世界から来たんですっ！！！」

「え……？」

唐突過ぎるオレの発言に、当然ながら頭上に“？”が浮かぶ憂。

「で、オレたちの世界だと、唯さんたちの日常がアニメとして放送されているんです……！」

「えっと……どういふこと、ですか？」

思わず“唯”というワードが出てしまったものの、そこにはツッコんで来なかったのはラッキーなんだろうか。

でも突然言われたら理解不能ですよ。しかし、オレにはこれしか説明能力がない……。

とにかくこうなったら実際にDVDを観てもらうしかない……！

「とにかくこっちに来て下さい……！」

DVDを再生すべくリビングのドアを開ける！

……しかし。

「……あれ、憂？ と……誰？」

開けた先には茶髪でモジャモジャの団子頭した女子が。おそらく彼女の部屋につながったのだろう。忘れてた、ドアを信じてはダメなんだった……。

鈴木純。憂と梓の友達。純はまるで何かにたぐり寄せられている

かのように、こちらに入ってきた。そして、

「あ、純ちゃん閉めちゃダメ！」

「え？」

ボタン。……しまった。純はドアを閉めてしまった。

「あーあ……」

「ん？　どうかしたの？」

肩を落とす憂、よく分かってない純。

「それより、なんか見慣れない家だな……　ってええっ！？」

異常に気づくの遅っ。

「さっき私自分の部屋にいたよ！？　なのになんで知らない人の家に！？」

慌てて自分の部屋に戻ろうとする純。だが、案の定……

「熱っ！！」

すぐ閉める。今度はやりすぎ天然暖房。

「砂漠！？　ってかこれどうなってるの！？」

「純……　私たち、閉じ込められちゃったんだよ」

2人目の犠牲者を生み出してしまった……。

その5：純粋な心に嘘はつけない。

「でも良かった、憂がいて。もし私だけ閉じ込められたら本当に怖かった」

ですよね……。

とにかく、“けいおん！”キャラを2人閉じ込めてしまった事といい、憂が持っているDVDといい、どうすればいいんだよ！！
というか今日、“どうすればいいんだ”って何回思った！？

「で、あのベースしよってる人誰？」

「あ、そういえば……お名前、なんていうんですか？」

今さら聞かれてなかった、というのに意外さを感じつつ。

「オレは野田^{のだ}佑^{ゆう}です」

今度は純が。

「あの、何年生ですか？」

「高1です」

「じゃあ、私たちの方が先輩か」

どうやら2009年の時点で、憂と純は2年生らしい。じゃあ今年はまだ高3か……？

「そうなんですか？」

「うん。私は鈴木純」

「私は平沢憂です」

既に知っている事だが、向こうの名前も判明した。やっぱり、“けいおん！”の世界に飛ばされたんだな、って事を思った。……ただ、今いる所は果たして“けいおん！”の世界の中なのかどうかは知らん。

「で、憂が今持っているDVDって何？」

すぐそこ行くか！？ 何か今の状況を聞き出すとか、またはオレの事をもっと聞いてくるとか思ったのに。というかオレ純と同じベ－シストだぞ！？

「それをね、今聞いていた所なの。えっと……野田くん、このDVDって何ですか……？」

でも、憂にはもうある程度喋っちまった。それに2人を目の前にして嘘なんてつけない！

「あの……オレの言う事、信じて下さい。平沢さんには話したと思いますが、オレ、実は別世界から来たんです」

「……うそっ」

落ち着け。落ち着くんだオレ。

「来た、というか飛ばされた、の方が正しいんですけどね。オレが、オレの世界にある高校に行こうとした時、なぜか目の前の景色が、いつものじゃなかったんです」

「それは……さっきの吹雪みたいな感じ？」

憂が聞いてくる。

「いえ、普通の道路沿いの風景ですが、オレの家の前の風景とは全く違うものでした」

律と漑の事は言わない。絶対に不審がられる。

「で、他のドアも変な所に全部つながっちゃったんだ」

と、純。

「そうです。で、オレも今途方に暮れているんです」

「なるほどね……なんだ、野田くんも困ってたんだ」

純が笑ったのにつられ、オレも笑った。だけど、この後予想外の出来事が。

「でも、何でここが別の世界だと分かったの？」

なんか別の声が聞こえた！？

その声の主はすぐに姿を現した。短めな黒髪に赤のメガネをかけ

た女子。

「和さん!？」

「和先輩!？」

真鍋和。唯の幼なじみで、生徒会長。

「なんでここにいますか!？」

憂が慌てた感じで聞く。

「私の部屋を出たら、ここに来ちゃったのよね」

「もしかして閉めました……？」

純がおそろおそろ。嫌な予感は裏切らず、

「うん、閉めちゃったわ」

「「はあ……」」

純と憂に、オレもつられてため息ついた。

和さん、オーラが違う……。けれど勇気を振り絞り、思い切って聞いてみる。

「あの……いつから聞いてたんですか？」

「鈴木さんが“憂がいてよかった”って言った部分から」

「聞いてたんですかそれ……」

顔を赤らめる純。不覚ながらかわいいと思ってしまった。

「あ、私は真鍋和よ。よろしくね、野田くん」

「は、はい」

憂や純の時も緊張していたが、やっぱり和さんの方が3、4倍緊張する……。

とにかく和さん、3人目の犠牲者です……。

その6：前に進むのみ。

「じゃあ話に戻らせてもらうけど、どうしてここが別世界だと分かったの？」

「えつとですね……」

少し頭の内容を整理して……落ち着いて……。もう、後には戻れない。

「今、う……平沢さんが持っているDVD、あれはオレ達の世界にあるDVDなんです」

危ない……思わず憂って言いそうになった。まだそんな親しくなっていない高校生男子が女子の名前を呼ぶなんて、絶対不審に思われる。

「えつ……？」

憂、純が顔に“？”を浮かべる中、和さんだけ理解できたようで、驚きの声を漏らした。

「ちょっと待って。ひょっとしたら、私達の世界の桜高軽音部の日常が、君の世界でアニメ化されているの？」

和さんの理解の良さに驚きつつ、オレは、

「……はい」

と肯定した。

「えええええ！？」

残り2人も、オレの言いたい事が分かったのか、驚愕して叫んだ。

そりゃ衝撃だ。だって自分達の日常が、それが直接接触する事のない人達にしても、不特定多数に知られてるって事が発覚すれば、誰もが気持ち悪く思うだろ？

「じゃあこれ……その軽音部のアニメのDVDなの？」

憂の持つDVDを指差して、純が不安げに聞く。答えは当然、

「はい」

すると、今度は憂が聞きづらそうに。

「それ……観ているの？」

オレは、一瞬本当の事を言おうかどうか迷った。しかし、3人の真摯な目を見た事によって、オレの心は嘘をつく事を許さなかった。

「はい」

そう、オレは3人の生活の一部を知っている不特定多数の内の1人。今オレの話を聞いている同年代の女子3人が、オレの事をなんて思っているかなんて全く想像がつかない。

でも、オレにとって確かな事がある。それだけは、お礼も兼ねて

言いたい。

「オレはこれを観て、高校から軽音部に入ってベースを始めました。まだまだ下手くそですけど、めっちゃくちゃ楽しいんで、ベース始めて本当に良かったと思っています」

「本当……なのか？」

その声は、どこか恥ずかしそうで、でも嬉しさが混じっているように聞こえた。

「はい……ん？」

また違う声色……？

発信源は、廊下の角。そこを見ると、黒髪でロングヘアーの女子が、頭から湯気を立たせて真っ赤な顔を覗かせていた。

「……漣、さん」

“けいおん！”の中でも、オレが一番懂れている人。

その7：終わりは突然やって来る。

「わ、私の名前呼ばれた……男の子に……」

ボタン、と大きな音が。倒れた！？

「漣先輩！？」

純が漣の元へ駆け寄る。

「漣さん、大丈夫ですか！？」

憂も純の後を追って。

「漣、しっかり！」

和さんは2人の後を歩いて。オレも漣さんがシャイなのは重々承知だったけど、そこまでひどかったとは……。

とにかく原因はオレである事間違いないので、オレは近くに行きません。本当はすっごい行きたいけど。

「漣先輩……ダメだ、ビクともしない」

「本当だ……和さん、お姉ちゃんだったらケーキ、みたいな漣さんが絶対起きる言葉ってありますか？」

「うーん、唯みたいに単純じゃないからね……」

和さん、単純って結構キツイワードですよ。

その後も3人は3分程粘ってたが、漣さんが起きる気配は皆無だった。

キリがない。中断せよう。

「とりあえず皆さん、脱出する方法探しませんか？」

「そうね。私達が知っている場所にドアが通ればいいんだけど……」

そう言って、和さんが勇敢にも玄関に行き、ドアを開ける。確かここは……！

本場雪国のブリザード直撃。すぐに閉めたものの……

「……寒いわね」

「和さん、頭に雪が積もってます！」

憂の言った事だけじゃない。トレードマークとも言える赤ぶちメガネもめっちゃ曇っている。

「……それにしても、なんでこうなったのかしら」

曇った赤ぶちメガネを制服の袖口で拭きながらつぶやく和さん。

「そんなのオレが知りたいですよ。玄関開けたらいきなり別世界ですからね」

「ふふっ」

和さんは少し笑った。メガネ無しの和さんの笑顔ってなかなか貴重？

「あ！ 桜高の前だ！」

「本当！？」

マジでか！？ 純の開けたドアの向こうを見ると、近くにアニメで良く見てた学校……桜が丘女子高等学校が見える。これで憂達4人が解放される！

「漣、起きて！」

「ん……？ 和？」

それに、漣さんも目を覚ました。とりあえず一件落着……？

「あの、皆さん靴は……？」

憂は外からこちらに来たのだから靴持っているし、和さんや漣さんは知らないけど、純は自分の部屋からこつちに来ている。外に出るんだから当然靴は必要だが、純はずっと靴下のままだった。

「あ、それならここに」

「鈴木さんどこから持ってきたんですか！？」

「適当にドア開けたらうちの下駄箱だった」

すげえ……至れり尽くせりだ……。

「じゃ、私達は行くわね。長居はできないし……」

和さんはオレに言った。そして、憂と純も。

「色々ありがとう、野田くん！」

「恐竜とかに食べられないように気をつけなよ！」

零さんは、下を向いたままだ。

……長いようで、短かったな……。

でも、迷惑かけちゃったんだし、その事は謝らないと。

「あの、何かすみません。そんなつもりなかったんですけど……」

「いいのよ。逆に私も面白い体験させてもらったわ」

和さん……。

「じゃ、これからはちょっと意識して生活しよう」と

「ダメだよ純ちゃん、意識しすぎるとつまらなくなっちゃう」

憂の言った事は自分の生活がつまらなくなるからなのか、それともオレら視聴者がつまらなくなるからなのか……。

その謎はさて置き。

「じゃあね、野田くん！」

「楽しかったよ、色んな意味で！」

「またね、野田君」

「……バイバイ」

みんながドアの外に出て行く。

「さようなら、皆さん！」

オレは、思い思いに話すみんなの後ろ姿を見届けて、ドアをゆっくり閉じた。

誰もいなくなった。さっきの時間がウソのように、シンとした空気が廊下に流れる。

これでもう、会えないんだな……。

でも、何か忘れている気がする。

何か……

「やっほー」

えっ！？

その8：矛盾が重なる時、事件は起こる。

「……あれ？　ちょっと、みんな」

唯の声だ。みんなを呼んでいるらしい。

「唯、どうした？」

律の声。律とは、直接は会っていない。

「どうしたんですか？」

梓の声がした。なんだかんだでオレは梓に不審者扱いを受けているからな……隠れた方がマシだ。

オレは開かれたドアの死角になるような所に、身を潜めた。

「いつもの部室じゃないよ!？」

「マジだ！　夢でも見てんのか？」

「……本当ですね。どうしましょうか？」

「どうしてお前はこつも落ち着いていられるんだ」

会話から推測するに、どうやら軽音部部室のドアがここにつながってしまっただけらしい。そんなのアリ!？

「みんなー!!」

遠くから琴吹紬……通称ムギの声が響いてきた。駆けてくる足音は、確実にこちらの方へと向かってくる。

それは、ただ事ではない事が起こったんだと容易に想像できた。

「澪ちゃんがトイレから消えちゃったの！」

「「ええっ!?!」」

驚く唯達。

なるほど。こっちから見ればただ単に場所を移動しただけに過ぎないけれど、ドアの行き先が変われば、当然その前に移動した人は消えるという事が。

「……ちよつと様子見てくる」

「りつちゃん!?!」

澪の様子を見るため、律が唯達のそばから離れたらしい。言葉の感じから、焦りが感じられた。

心配いらなですよ、と言いたい所だけでも……。

「……私達も捜そう」

「うん」

「はい」

唯の提案にうなづく2人。そして、扉は閉められた。

何か、嫌な展開になって来た……！

その9：打ち明ける事は良い方に働く事が多い。

それからしばらく時間が経った。オレからは全く唯達の状況が把握できない。把握しようとドアを開けても、その先は桜高とは全く関係のない場所だった。かといって、オレの家の一部につながっている訳でもなかった。

オレいてもたっても居られずに、歩き回っていた。オレは、唯達をパニックに陥れてしまったんだ。

きつと、今も澪さんのことを捜し回っているんだろう。本当に申し訳ないと、彼女達に謝りたい気持ちに胸を埋め尽くす。

いつの間にか歩き回った事の疲労が溜まり、オレはとあるドアの前にベースを背負っている事も忘れて寄りかかる。いや、この疲労は精神的なものの方が多いんじゃないのか？

「……ふう。ついてるようで、ついてないよな」

その時。オレは何かを押された。

「うわっ!？」

バランスを崩し前に倒れるオレ。押された方向を見ると……

「……これ、なんなんですか？」

「さあ……?」

きょんとした5人の女子高生。

オレもきょんとしている。

今、何がどうなっているんだよ？

「それよりも！ 何がどうなっているのか分からないけどもあの人に謝らないと！」

澪さんの声。本来はオレが謝るはずだけど、言い出せるはずがなかった。

「あ、ああ……ごめんなさい」

律がばつの悪そうな表情で謝る。オレは少し残っている自分の意志で、「いえ、こちらこそ……」と小さな声で言う。

「あつ！ 朝に会った超能力者だ！」

「唯ちゃん、知っているの？」

ムギが聞く。超能力者発言にツッコむ余裕はないらしい。

「うん。ね、あずにゃん？」

「は……はい」

少しだけ頬が赤くなる梓。人前であずにゃんと呼ばれた事に恥ずかしくなったんだな。

「それにしても、何で準備室が別の部屋になっているんですか？」

梓は通常に戻りました。しかし……

「あつ。あたしのドラム……」

「私のキーボードも……」

そう。律とムギの2人は部室である準備室に楽器を置いている。そのため、2人の楽器は……。

……でも。ひょっとしたらオレがここにずっといるのが問題かも？

だって、オレがこの部屋にいた事で、“けいおん！”のキャラ達が次々来訪してきたから。ならば、オレがここから出れば……。

「あの、すみません」

一斉にオレの事を見ってくる。視線が痛い。でもここでひるんではいけない。オレは立ち上がって、

「ここから出てもいいですか？」

と聞いた。

あ、まずかったなこれ。と気付いた時には遅かった。

「え……あ、あの……」

狼狽する律。明らかに5人に不審な目で見られているよオレ！

そりゃ女子校に男子高校生がいるんだから当然っちゃ当然だが！

「と……とにかく逃げましょっ！」

梓が逃亡を促した。しかし、

「……待つて！」

それは他でもない、澪さんの声だった。

その10：全てはあの日から。

「この人は変な人なんかじゃない!」

普段ならこの状況下で絶対言うはずのないセリフを漑さんが言ったので、みんな驚いた。

漑さん……。

「この人……私達に憧れて、軽音部入ってベース始めたんだって。だから……」

「漑ちゃん……?」

「漑ちゃん、どうしたの?」

ムギと唯が漑さんの様子を心配する。しかし……。

「唯、ムギ。漑は本気だ」

「律先輩……?」

律が、その誤解を解いた。

「漑は絶対に嘘なんてつかない。特に、こういう時とかな」

「律……」

この時、2人の友情はオレが想像していたよりずっと大きいもの

なんだな、と思った。

「君！」

「は、はいっ!？」

突然律に指差されてビックリした。

「とりあえず事情聴取だ。こっちへ来ーい！」

――

「そうなんだ……」

オレは自分の身分を明かした上で、今まで起こった事を全て吐いた。

「……なんか、不思議だよなあ」

「そうですね。私達が別の世界で有名人だなんて……」

律と梓はどこか思案顔で。ムギは……

「あれ、澪ちゃんどうしたの？」

「わ、私達が……ゆゆゆ有名、人……」

人間加湿器と化した澪さんを心配。あー……。

「ゴメンなー、澪いつもこうで……って知ってるか」

「でも、初めて気絶したのを見た時は驚きましたですけどね」

「ははっ、そうかぁー……」

普通に律と話してるよ、オレ！ スゲーよおい！

でも普通なら、自分のプライベートを思いっきり知られている同年代の男子の事を、気持ち悪く思っただけだろう。

でも、放課後ティータイムのみんな、いや憂や純、和さんも含め、そんな態度は一切見せなかった。

本当に、いい人達なんだな。

そして、オレはこのアニメが好きになって良かったと、心から思えた。

こうしてみんなと会えたのも。ベースを始めてたのも。

全ては、深夜寝れなくてなんとなく、ベッドに寝転がりながらケイタイのワンセグを点けたあの日から。

「あの、それよりも準備室行けませんよ！」

梓の声で、ふと現実……いやけいおんの世界に戻る。

「そうだったわね……」

ムギはやはり落ち込んでいる様子。でもきつと……

「心配しないで下さい。平気だと思います」

「「えっ？」」

オレは一旦準備室のドアを閉めた。そして、再び開けると……。

「やったー！ 元に戻ったよー！」

唯が大声を出して喜ぶ。都合良い時はドアを信じてても問題ない、ということをついさつき知ったからな。

「なんだ、そんな事だったのか……」

「良かったー……」

楽器の無事確かめるためだろうか、律とムギは準備室の中に入っていた。

「佑も入って来いよ」

マジで！？ 律が準備室の中から顔を覗かせて言ってきた。

「律さん、入っていいんですか？」

「もちろん！ ファンサービスっつーもんよ！」

その言葉を聞いた瞬間、自分から笑顔が溢れていくのが分かった。

「……はいっ！」

その11：笑う門からは酸素が逃げる。

準備室の奥には、律の黄色いドラムとムギのキーボードがちゃん
とあった。良かった、無かったら一体どうなってた事やら……。

「さあ、ここに座って。お茶準備するから」

「ありがとうございます」

オレはベースを下ろしてから、ムギに言われた通りの場所……つ
まり梓のいつも座っている椅子の横にある椅子に座る。ちなみに、
楽器が置いてある方の椅子だ。

ということは必然的に……。

「よいしょっ」

梓と、

「……」

人見知りモードの湊さんの近くになる。うわ、緊張する。何か顔
が熱い……。

「あ……ごめんなさい。私、勘違いしちゃって」

梓がばつの悪そうな顔で謝ってきた。なんかオレの方が申し訳な
いな……。

「いえ、それがきつと普通だと思いますから」

「はい……」

何か気まずい……。

「ムギー、今日のお菓子は何だい？」

こっちがこんな空気の中でもお構いなしに聞こえてくる、元氣はつらつ律ボイス。

「今日はケーキよ」

その質問に、超高級ティーセットを準備しながら返答するムギ。

「やったー！」

「ケーキ、ケーキ」

律に唯が便乗。嫌でも2人に視線が行く。

「ケーキッケーキッキー」

あ……律の悪ふざけ始まったな。

「ウッキッキー、ウッキッキー」

唯がなぜか退化。ケーキ関係ないし。

「「ひらけ！ ポンk……」」

「やめろー!!」

ついには禁句を発しようとした2人を復活した澪先輩が食い止めた。スゴい……おそらく何にも打ち合わせしてないのに息ピッタリ……。

「佑くん？　おい」

いつの間にか思考の淵とかという謎の場所に自分は行っていたみたいだ。ムギさんの手が、オレをここ、音楽準備室に帰還させた。

ちなみに、アニメを見ているクセに今まで軽音部の部室をずっと音楽室だと思っていたのは内緒だ。

「……あ、ムギさん。ありがとうございます」

「ううん。さ、準備できたからお茶にしよう？」

本当に……？

「あの……いいんですか？」

興奮6割困惑4割で、恐る恐る聞いてみる。

「うん。だって佑くんのためにお茶淹れているんだもん」

オレの……ため……。

「ありがとうございます!」

気が付くとオレは起立してた。そして上半身を約90度折り曲げていた。

「そんなにかしこまらなくてもいいのよ」

「はっ……」

自分、何やってんだろ……！ 恥ずかしい……！！

「ぷっ……」

え？ あ……。

「あはははは……！！ 面白いよ野田くん……！」

漑さんが突然壊れた。……はつきり言うが、何が面白いのか訳分からない。

「漑ちゃんってさ、何か笑いのツボがよく分からないよね……」

唯がケーキを口に運びながら、こうつぶやくのが聞こえた。てかいつの間に食べているんだ。

「修学旅行の時もそうだったよな……」

「それってりっちゃんが原因だったんでしょ？」

「あ、そうだったなー……」

またしでかすな。

>しゃれこうべ<

やっぱり耳元に小声で言いやがった。

「あははは！ あは、あはは……うつ」

「澪先輩！？」

「「澪ちゃん！？」」

「えっ……お、おい！」

澪さんが椅子ごとガタンと音を立ててひっくり返ってしまった！！

「だ、大丈夫ですか！？」

「う……うん。ちょっと笑い過ぎて酸欠になっただけ……」

この時、この場にいた誰もがどうリアクションすればいいのか困ったに違いない。

その12：皮を被り続けるのは損。

澪さんが復活したついでに人見知りモードを解除し、これがオレみたいな低俗な族が飲んでいいのかと疑問に思ってしまうような、ムギの超高級茶が並べられている。

「……あれ、佑くん食べないの？」

「あ、もう食べていいんですか？」

「もちろん」

そう言えばもう食ってたよな唯と律。バカじゃん、オレ。

「じゃあ、いただ……」

……けねえよ、こんなにガン見されたら。

「どうしたの？」

「あ……いえ」

当然目線が気になって食べないなんて言えるはずない。オレは真っ白なショートケーキの一部をフォークで切り取り、それを口の中に運ぶ。

……こんな規格外の甘さ、アリ？ ただ甘いという訳じゃない。何というか、包み込むようで深い甘さというか……。

とにかく、単純な甘さではない事は分かった。めちゃくちゃ美味い。

「笑った〜!」

「これぞ満面の笑顔!」

と、さっき勝手に? 食ってた唯と律。あれ、いつの間にか笑ってた?

「良かった、喜んでくれて」

「ありがとうございます。オレ、こんなに美味しいケーキ初めてです」

これは少しずつ食べないともったいないな……。

「やつぽー」

突然ドアが開いた。オレは一瞬身構えたけど、入ってきてても至っておかしくない人物だったので緊張を解いた。

「あ、さわちゃん。こんちはー」

「こんにちはりっちゃん。……あれ、どうしたの男子なんか連れてきちゃって」

軽音部の顧問、山中さわ子先生。近くで見ると意外に美人。

「えーと……」

（漣、説明頼む）

（何で私なんだよ！？）

（だってさ、漣は一度佑の家に入ったじゃん）

（でも、一番に佑の事聞き出したの律だぞ）

（いや。私は情報を上手くまとめる能力がないのだ）

（それ、威張って言う事が……？）

律と漣さんのやり取りはキリがないと踏んだ。

「あの。オレの方から簡単に説明していいですか？」

伝家の宝刀、かくかくしかじか。今のオレの心情は、もうどうでもいいやつて感じだ。

――

「なるほどね」

簡単に納得した！？

「いい機会じゃない。みんな、同じ軽音楽部の先輩として野田くん
に色々教えてあげてね」

しかもこの清楚な美人女教師はそう言ってやがる。何かすごい好感度を意識しているの気がするのは多分……ビンゴだな。

「さわちゃん、猫かぶっててもムダムダ……」

律が揮発性の言葉をばらまいた。

するとほら、さわちゃんはメガネを外しまるで怪物のような目で律に威圧を掛けた。それにあからさまに怯える律。マジ怖ええ……。

「とにかく野田くん。変な部員達だけど、楽しい時間過ごしてね」

さわちゃんはキレイな作り笑顔を見せて、準備室からそそくさと出ていった。

……なぜ出ていった？

「変とは失礼だ！ 個性的と言えー！」

「なんかそっちの方が傷つきます」

律が懲りずに文句たれている所に梓が一言。

「もう、さわちゃんお茶したいなら素直にしてればいいのに」

「うん。いつでも準備できるのにね」

さわちゃん的心情を読み取った唯に同調するムギ。……なるほど、だから逃げてったのか。禁断症状起こしてないか気に……

またしてもドアが開いた。ひょっとして本当に禁断症状起こして戻ってきたのか心配になったが、そうではなかった。

「あれ……？　憂に和ちゃんに……純ちゃん？」

唯の言う通り、確かにあの3人がまた迷い込んで来た。片手にD
VDを持って……。

その13：不思議不可思議摩訶不思議

憂がアニメ“けいおん!!”のDVDを持っていたので、なんと鑑賞会が行われる事になった。すげえぞこの展開……！なお、さわちゃんはカッコ悪いシーンしかなかった気がするので、あえて呼んでいない。

あいにくブルーレイではなかったため、ノートパソコンでも再生可能だったのが良かった。本当に良かった。時代遅れも悪かねえ。

ちなみに3巻だ。修学旅行と留守番の話が入っている。まずは修学旅行。

「先輩達、どんな修学旅行だったんだろ……」

梓は楽しみな感じ。だけど……。

「見えない聞こえない見えない聞こえない……」

澪さんは逃亡してます。まあそれも当然か。

「じゃ、再生するぞー」

7人が様々な思いでPCに注目し、約1人が意識を必死に逸らす中、律が画面の再生ボタンをカチツと押した。

すると、注意書きなどがあつた後、映し出される#5の冒頭部分。憂が唯の修学旅行の準備をしている所。

「わ、私の思った事がそのまま……！？」

まず、憂がその事に驚く。

「スゴい、憂の家そのままだ」

「そうね。当然なんだろうけど、やっぱり何か変な気持ちがするわね」

その次に純と和さん。

「不思議な事もあるんだね」

「ムギ、今までだって十分不思議な事起こっているから」

ムギの今更な発言に軽く指摘する律。

「唯先輩、修学旅行の準備くらい自分でやって下さいよ」

「えへへー……」

梓の言葉にあからさまに照れる唯。

「唯、それ褒めてないぞ」

「あはは……」

それにツッコむ律、苦笑いする憂。

「見えない聞こえない見えない聞こえない……」

そして依然逃避中の澪さん。

冒頭部分が終わり、オープニングへ。2期前期オープニング、“GO! GO! MANIAC”が唯のボーカルで流れ出す。

「…………あれ？」

ここで澪さんが反応しこちらに来る。“澪ちゃん復活”と唯がつぶやく。

「こんな曲、やった事あるっけ…………？」

「そうだよな…………ちよつとストップ」

澪の疑問に、律が同調し一旦動画を停止させる。動画は軽音部の周りをグルグル回っている所で静止している。

「ムギ、この曲知ってるか？」

「ううん。私がこんな曲作った覚えないわ」

話から推測するに、“GO! GO! MANIAC”はここには存在しない事が判明。

「じゃあ何で私の声で歌ってたの…………？」

唯は困惑している様子で言った。すると、律が……

「ここはこの、名探偵田井中律にお任せあれ！」

と、ウインクしながら人差し指を前に突き出す。

「おお！」

「りっちゃんかつこいい！」

期待する唯とムギ。逆に呆れ顔の梓と漣……。

「律、純がもう答え分かったって」

「なにっ!？」

和がやれやれな感じで言うと、律が名探偵キャラのままオーバーに驚愕。

「アニメって声優さんがいるじゃないですか。その人が唯先輩の声に似せて歌っているんですよ」

言われてみれば、当然の事でした。

「……くそお。今度こそ頑張って役に立ってやるからな！」

そのセリフ、正義か悪か？ 判断が微妙だ。

「皆さん、とりあえず見ましよう?」

憂が気を利かせてなのか、それとも早く見てみたいからなのかは分からないが、続きを見るように促す。

「そうだな。律、早く押せ」

「了解！」

澪さんの命令で律がボタンをクリックする。しかし……

「りっちゃん、真っ黒になっちゃったよ？」

「律先輩が今押した所、停止ボタンですよ……？」

「……あ」

ムギと梓に指摘され、気づく律。ポインターは確かに再生とは違う四角い記号の上にあった……。

「また最初の注意書きなどを見なければいけないわね……」

「平気だ！ それなら早送りで……」

和の発言に必死に繕おうとする律。だが、そこに澪さんがトドメを。

「大体のDVDは、ここ早送り出来ないぞ？」

「そんな……バカな……！！」

DVD鑑賞会はまだ始まったばかり。

その14：オレならどう思っただろう。

「さわ子先生、写真一緒に撮っちゃってる……」

「さわちゃん呼ばなくて良かった……」

只今、DVD鑑賞会中。梓の発言に律がほっとするのを眺めながら、オレはこんな事を思っていた。

不思議だなあ……。

もしオレの生活が、今いるけいおんメンバーと同じように別の世界でアニメ化とかされていたと知った時、オレはどう思っただろう。

「すごいですムギ先輩！ 関西とかに住んでたんですか？」

「ううん。でも何回か関西の方がこちらにお見えになった事があったから……」

感激する純の質問に答えるムギと、

「唯といい勝負かもね」

「ほえ？ 和ちゃん、何？」

「……何でもないわ」

和さんの妄言に反応する唯とのやり取りを見つつ、オレは思った。

もし、オレがオレの生活のアニメを見ているという奴と会った時、オレはそいつにどういう印象を持つだろう。

「ええベコやあー」って……」

「何やってるんですか……」

呆れる純と梓と、

「でも、たくさん撫でてやったからだいじょーぶっ!」

「だいじょーぶっ!」

「律、唯、何事にも程度というものがあるんだ。さわ子先生がサン
グラスにマスクを着用してLHRに出た時を思い出してみる」
ロングホームルーム

「「なっ……!!」」

澪さんが例示をして咎め、唯と律の背後に落雷したのを見つつ、オレは思う。

もし、オレがそのオレのアニメを見た時、オレはどのような反応をしているのだろうか。

ただ、そのどれにしてもオレは素直に受け入れたいと思った。

今いる彼女達のように。

DVDが男子禁制の場面になるのを察し、オレは後方に退き目をつぶった。

「ちよつ、待て何で私達の……佑！ 見るな！ ……ってあれ？」

案の定その場面に突入した時、漣さんが慌ててオレを止めようとした。

「平均よ。佑は後ろでおとなしくしているわ」

和さんがそれを抑える。漣さんは今、顔が赤く染まっている事だろうな。

見てみたいけど我慢我慢。

それからも笑ったり、ちよつと戒めたり、それこそ色々な表情を見せながら彼女達はDVDを鑑賞していた。

そして、エンディング。

「あ、私が歌ってる……」

漣さんが少し頬を染めて言う。2期の前期エンディング、『L i s t e n ! 』にみんな釘付けのようだった。

「漣ちゃんカッコいい！」

「やめろよ唯……」

「何か、みんないつもと違う感じがする」

「そうそう。クールな感じだよな、曲も衣装も」

ムギと律も感想を漏らす。

「何か、軽音部のイメージと違うわね」

「和先輩、同感です」

「お姉ちゃん……」

和さんに同調する純、なぜか嬉しさと寂しさが複雑に混ざり合った表情を浮かべる憂。

「私この曲やってみたいです！」

そう梓が言うと、とんでもない超常異常現象が起こった。

ハラリ、と頭上で音がした。それは同じく、軽音部5人にも起こった事だった。

「ん……？」

手に取って、それを見してみる。すると目に飛び込んでくる文字は……。

『Listen!』

そして、下にはベースのタブ譜が手書きで書かれていた。

頭上を見る。

何も無い。

手元を見る。

『Listen!』とタブ譜。

紙を持つお互いの顔を見合わせる。

「えええええっ!?!」

本日何回目か、絶叫が響いた。

その15：全てを知った気になっているだけ。

「あずにゃん、教えて」

「もう、仕方ないですね……」

突然舞い降りてきた『Listen!』の楽譜。どうせだから、オレを加えてやってみようという事になって。アンプと譜面台を拝借し、オレは相棒の黒いジャズベを持っている。

ちなみに和さん、憂、純はお茶しながら見てる。純はベースを家に置いて来てしまった事を激しく後悔してた。

もちろんボーカルは漣さんという方向性で進んでいたが、当の本人が断固拒絶したので……。

「なぜオレがボーカルですか。律さん」

「せつかくだからやってみようぜ?」

「オレの担当はベースだけであって、弾きながらボーカルは全くできませんけど」

「じゃあベース無しでボーカルに専念しろ」

「ちょっと律! それは酷いんじゃないのか」

漣さんがオレをかばってくれたけど。

「じゃあそついう原因を作ったのは誰だよ」

それが畏だった。ナイス律。

「うう……」

「観念してボーカルやりなさいな」

「う……うん」

ちなみにボーカル楽譜もちゃんとあります。

「なんか私の作った歌詞じゃないから、ちょっと変な感じがするなあ……」

とか言いつつ、歌を口ずさむ澪さん。初見だというのに音程とりズムがバツチり合っているのですすがだと思った。それにベースも弾くのだから……やっぱり凄い。

オレはバンドでこれの曲やった事あるからほとんどバツチリ。技術じゃまだただけど……。

「初めて見る楽譜なのにもう皆弾きこなせてる……」

純が言う通り、やっぱり皆凄い。アニメではほとんど見られない、やる時はやるというのが今よく分かった。この光景がなぜテレビじや流れないのかな……。こういうカッコいい所も流してもいいのに。

そして。

「あら、新しい曲？」

ドアからさわちゃん登場。それと同時に答えづらい質問もぶっ放してきた。すると、澪さんはベースを弾く手を止めて少し考えた後、

「新しい曲というか、なんというか……降って来たんです」

まあ、それとしか言えないな普通。

「降って来たって……？」

更に聞くさわちゃんの質問にやはり澪さんのキャパを越えたらしく、目線で和さんに助けを求めた。という事で和さんにバトンタッチ。

「何もない所から楽譜が突然降って来たんです。それが面白そうな曲で、せっかく佑もいるのだからやろうって運びになったんです。

……大体はそんな所よね、澪？」

「うん。ありがとう、和」

和さんみたいに冷静に状況説明出来れば、特に今日という日はどれだけ楽だったか。

「私も聴かせてもらおうかしら」

そう言っつて、さわちゃんは席に座り……真っ先にお菓子に手をつけた。

ついに、オレの存在がどこでも良くなったらしい。

それにしてもこうやって見ると、漑さんカッコいい……。右手の指は思った以上にスラッとか細くて、でもしつかりと確実に弦を押さえて音を決めている。やや吊っている目は楽譜を真っ直ぐ見つめ、小さな口は控えめに小さく動く。

オレは憧れて漑さんを全部知った気がした。でも今隣で練習に集中している漑さんの真剣さを見て、『ベーシスト・秋山漑』を、初めて知った気がした。

カッカッカッ、とドラムのスティックを叩き合わせる音が鳴った。それと同時に全ての音が止んだ。

「そろそろ一回やってみるか？」

律がスティックを下ろし、提案する。それに皆が準備OKの旨をそれぞれ伝える。

「の、野田くんは大丈夫か？」

顔をほんのり染めつつ漑さんが聞いてきた。やばい、どストレートで来る上目遣い……。

何とかその動揺を隠して、“はい”と返事した。

「よし、それじゃあ行くぜっ！」

律の元気過ぎる声が響き、オレは心の準備をする。テーブルでお茶してた4人も、手を止めてこっちに集中している。

ライブじゃないっつーのに、心臓がバクバク言ってる。というか
つい最近あった初ライブ以上の緊張だ……。

でも、澪さんがオレと一緒にやってくれる。

気負わずに、楽しんで弾こう。いつも通りに！

ムギのキーボードが、ロックオルガンの音でイントロのフレーズ
を奏で、一生思い出に残るだろう演奏が始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2824w/>

けいおん! トリップもの。

2011年11月15日17時35分発行